

エリートドクターと再会したら、

溺愛が始まりました

都心から電車で十五分ほど。高級住宅地と名高いその土地に、それはそれは煌びやかな建物が一棟ある。

二階堂総合病院。

名前だけ聞けば、よくある普通の総合病院のように思えてしまうそこは、今とても話題になっている病院だ。おそらく、初めてここに足を踏み入れた人物は皆、口を揃えてこう言うだろう。

“ここはホテルかお城か何かか？”と。

中が見えないようになっていいる厳かな雰囲気の外観。そのエントランスの向こうには柔らかな光が差し込む広いロビー。さらにその向こうにあるレセプションにはきっちり髪を束ねた容姿端麗な女性が二人。右には大きなエレベーターが三基。左には夜間面会用の通用口。そこにいる初老の男性は、どこぞのコンシェルジュのように穏やかな笑みを浮かべている。天井にはシャンデリアが輝き、どこからか静かなピアノのクラシックが流れていた。とても病院とは思えないほど煌びやかで上品な雰囲気が漂うここは、いわゆる“VIP御用達”の総合病院だ。政財界の重要人物や大物芸能人、さらには世界的に名の知れた大企業の重役などを主な顧客としており、そのVIPのプライバシーを守るべく、万全のセキュリティが敷かれているのが最大の強み。

外来は基本的に予約制で、入院中もお見舞いに行けるのは事前に患者が許可した人か、近親者の

中でも限られた人だけだと言うから驚きた。

そんなVIP御用達、いや、VIP専用と言ってもいいかもしれない病院の中を、私は恐る恐る突き進む。外は夏の日差しが肌を焼くようにジリジリと強く照りつけていたけれど、ここは程良く冷房が効いていて一気に汗が引いていった。思わずため息のような息を吐くけれど、私はここにお見舞いに来たわけでもないし、まして患者でもない。もちろんVIPなわけがない凡人の私は、この空間に存在していること自体が場違いなのは自分が一番良くわかっていた。

「本当、どこを見ても落ち着かない……」

しかし、呼ばれてしまったのだから仕方ないじゃないか。

きよろきよろと辺りを見回して、自分のスマホとロビーを見比べている私。

「もう……どこにいのよ……まだかな……」

おそらく周りからは大分怪しく見えているのだろう。レセプションから出てきた女性の一人が、怪訝そうに私の元へ歩いてきた。

「いかがなさいましたか？ お見舞いですか？ 患者様のお名前を伺っても？」

凜とした綺麗な声と立居振る舞いに、凡人の私は圧倒される。

「い、いえ……。あの、お見舞いではないんです」

「……では、患者様でしょうか」

「いえ違くて。紛らわしくてすみません。脳外科医の百瀬傑ももせ すぐるに会いたいんです……」

萎縮しているのが丸わかりで情けないものの、馬鹿みたいに声が震えた。

「百瀬ですか？ ……失礼ですが、どちら様でしょうか。本日百瀬宛てにお客様がいらつしやるとは私共は伺っておりませんが、アポイントはお取りでしたか？」

一気に私を疑うように目が鋭くなった女性に、肩が跳ねる。

「あ、……すみません、申し遅れました。私、百瀬傑の——」

続きを言おうとしたところで、「——唯香！」と、私を呼ぶ声が聞こえて振り向いた。

「百瀬先生！」

女性が驚きの声をあげて一礼する中、私はその無駄に高い身長と奥二重の垂れ目を睨み付ける。

「……傑くん！ 遅いよ！」

「ごめん唯香。オペが思ってたより長引いた」

「ロビーまで迎えに来てくれるって言うから来たのに。私ここ来たの初めてなんだから、ちゃんと待っててくれないと困るよ」

なるべく目立たないように小声で文句を言う私をまあまあと窘めるこの男に、私は一つため息をこぼす。

「悪かったって。ほら、行くぞ」

事態を飲み込めていないレセプションの女性に「ああ、こいつ俺の身内だから。連絡してなくて悪かったよ。こいつに非は無いから責めないでやって」と言い残して去っていく傑くん。

「百瀬傑の従兄妹いとこの春風はるかぜと申します。お騒がせして申し訳ありませんでした。失礼します」

私も慌てて深々と頭を下げてから、すでに数メートル先を歩いている傑くんの後ろを追いかける

ように足を進めた。

目の前を歩く医者は、百瀬傑。三十五歳。私、春風唯香の従兄妹だ。私よりも十歳年上の彼は、この病院に勤める優秀な脳外科医だ。今もスクラブの上に白衣を身に纏い、すれ違う看護師に何か指示を出している。胸ポケットに入っているであろう端末は、オンコールの度に大きな音を鳴らすのだろう。傑くんが歩けば、看護師や関係者は皆揃って頭を下げたり端に避けたり、敬意を全面に表した態度を取る。この病院で百瀬傑とえば、脳外科の中でも一、二を争うエリート医師なのだ。エレベーターに乗りこむと、傑くんは行き先のボタンを押してくれた。どうやら向かう先は十階らしい。この病院は一階と二階が吹き抜けのロビーとなっており、三階にはコンビニやレストラン、入院患者用の美容室やエステスペースまである。四階から上が病棟で、最上階である十二階は院長室とその他重役の部屋があり、カードキーを持っている限られた人物でなければエレベーターのボタンすら押せない仕組みになっているのだと傑くんに聞いたことがある。

一切の揺れを感じないまま小さな音を奏でて到着を知らせたエレベーター。開いた扉から降りると、やはりそこはどこぞのホテルのフロアのような煌びやかな空間で、とてもここが病院だとは思えない。

「すっご……」

「ああ、これ？　なんか院長の趣味らしいぞ」

「院長先生の……？」

本当はホテルを営業したかったのでは？　と思いたくなってしまう派手さに眉を顰めながらも、

そのまま傑くんの後ろを少し歩いていく。すると奥にある大きな扉の前で足を止めた。そこはどうかやら病室のようで、二〇〇五と部屋番号だけが記載されている。普通の病院ならその周辺に患者の名前が書いてありそうなものだけど、ここは違うらしい。

そんなことを考えている間もなく、傑くんは部屋の扉を開いた。

「ちよつと傑くんっ、ノックくらいしなよっ」

「あ？　別に來ることわかってるからいいんだよ。……梨香子。唯香が来たぞ」

「……し、失礼します」

ちよいちよいと手招きされて、私も恐る恐る病室に入る。中は十五畳ほどの広い部屋になっており、扉から向かって左に大きなクイーンサイズのベッドがある。その反対側にはソファとテーブル。大きなクローゼットと壁掛けの大画面の液晶テレビ。奥には簡易キッチンに冷蔵庫まであり、病院なのにそこらのアパートよりも綺麗で設備が整っていて驚いた。むしろ私の家よりも豪華だ。もはやここに住めそうな気さえしてしまう。

そんな部屋のベッドには、私もよく知っている人物がいた。

「……梨香子さん」

「唯香ちゃん、いらっしやい」

柔らかな微笑みに、私も肩の力が抜けて口角を上げる。

「唯香ちゃん、ごめんね。こんなことお願いしちゃって」

「いえ、いいんです。些細なことですし、梨香子さんの頼みですから。私で良ければいくらでも

使ってください」

「本当にありがとう。助かるわ」

百瀬梨香子さん。ここまで案内してくれた傑くんの奥さんだ。梨香さんは現在妊娠九ヶ月で、もうすぐ第一子が産まれる。ここ、二階堂総合病院の産婦人科で入院しているのだ。

「入院生活はどうですか？」

「うん、何もしないでつて言われると逆に困っちゃって、ずっと本読んだりテレビ見たりしてるんだけどね。さすがに入院期間が長いと暇で暇で。それにずっとだらけちゃってるから、この子が産まれた後にちゃんと母親が務まるのかすごく不安なの」

妊娠後期になって急に血圧が上がってしまった梨香さんは【妊娠高血圧症候群】と診断され、お腹の中の赤ちゃんに危険が及ばないように大事をとって入院することになっていた。

すでに一ヶ月ほどが経過しており、幸いにも今は安定しているため、もう少し経ったら予定帝王切開で出産する予定だ。

そんな梨香さんの元に、何故私が呼ばれたのか。

「本当にごめんなさいね。突然、着替え持ってきて来て、だなんて。仕事で忙しいのにわざわざ届けてもらって申し訳ないわ」

「いえ、傑くんじゃ忙しくてそんな暇無いでしょうし、全然大丈夫ですよ。……むしろ私が勝手にクローゼット開けちゃって本当に良かったんですか？」

「うん。唯香ちゃんなら全然良いの。助かったわ。ありがとう」

梨香さんが入院前に用意していた、出産時やその後に使う予定の洋服や下着の数々。まさか出産まで入院することになるなど微塵も思っていなかった梨香さんは、すぐに退院できると思っていた。そのためその荷物を持つてくるのをすっかり忘れていたらしい。ちよつと、いや大分抜けている人なのだ。最初は傑くんを持つてきてほしいと頼んだらしいものの、断られてしまったらしい。なんでも梨香さんの産後に少し休暇を取るために今のうちにオベの予定をできる限り詰め込んでいて、家に帰っている暇が無いんだとか。

そこで白羽の矢が立ったのが、私だった。

この病院と二人の自宅マンションのちょうど間にある会社に勤務している私。今朝傑くんから電話があり、〃悪いんだけど、梨香子の着替え持つて来て欲しいんだよね。今日の十二時半くらいでいいか？ 病院のロビーに来てくれれば迎えにいくから〃と一方的に言われて電話を切られた。

そのまま傑くんに掛け直したところで適当人間の傑くんがもう出てくれないのはわかっていたため、梨香さんに直接かけ直した。すると平謝りで〃産後に使う着替えやあれこれを持つて来て欲しい〃とお願ひされたわけだ。

いつも何かが必要な時は傑くんの母親が持つて来てくれるらしいのだが、さすがに義母にクローゼットを探されるのはちよつと嫌だったらしい。義理の従妹である私だって、立場としては似たようなものはずなのだが、昔から妹のように可愛がつてもらっているからだろうか。どうやら私は例外らしい。梨香さんが入院した時に、〃何かあったら頼るかもしれない〃と言われて半強制的に合鍵を渡されていたものの、まさか本当に使うことになるうとは。

「じゃあ、私は会社に戻ります」

「ごめんね、唯香ちゃん。忙しい時に」

「いえ、全然大丈夫です！ また何かあったら言ってくださいね」

「ありがとう」

「あ、唯香、帰る前に悪いんだけどちょっとした用があるんだ。少しかけ時間いいか？」

帰ろうとしたところで傑くんに呼び止められる。私は腕時計に目をやり、頭の中でこの後のタイムスケジュールを確認した。

「あー……、昼休み終わっちゃうから十分くらいなら」

「わかった。すぐ終わるから。悪いな、ちよつと移動するぞ」

「うん。……じゃあ梨香子さん、無理なさらないで、無事に産まれることを楽しみにしてますね！」

「ありがとう。産まれたらすぐ連絡するわね」

「はい。じゃあ、失礼します」

梨香子さんに手を振って、また傑くんの後を追いかけるように病室を出た。

「……プレッシャーかけちゃったかな……」

「ん？」

「梨香子さんに。無事に産まれること楽しみにしてるって」

ただでさえ入院していて体調面での不安も大きいだろう。無事に産まれてくることを一番望んでいるのは梨香子さんだ。妊娠中はかなりナーバスになるって言うし、入院していれば尚更気持ちの

浮き沈みが激しいと思う。予定帝王切開で日にちが決められているからって、その前に陣痛が来たりとかも考えられるわけだし。そもそもお腹を切る恐怖もあるだろう。……他にもっといい言葉が

あったんじゃないだろうか。そう考えると後悔が募る。

だけど、傑くんはそんな私を見てあっけらかんとしていた。

「ああ、まあな。でも、梨香子は嬉しかったと思うぞ」

「……そう？ 怒ってないかな……」

「梨香子がお前に怒るわけねーだろ。そんな弱い女じゃねーよ。大丈夫だからお前は黙って連絡待ってりゃいいの」

私の頭を雑に撫でて先に行く傑くん。

傑くんは適当人間だけど、間違ったことは言わないし梨香子さんのことを誰よりも理解している。だから、傑くんが言うなら多分大丈夫なんだと思う。そう思えるから不思議だ。

「ほら行くぞ。時間無いんだろ？」

「あ、うん」

振り返って笑う傑くんに、頷いてから慌ててその背中を追いかけた。

「ねえ、ところでどこに行くの？」

「ん？ 医局」

「医局!? ……それ私が入っちゃダメなやつじゃん」

絶対関係者以外立ち入り禁止のやつじゃん。入ったら怒られるやつじゃん。

思わず立ち止まると、「俺が許可してんだからいいんだよ。つべこべ言わずにちよつと来い」とさつきまでの笑顔はどこへやら、今度は不満気に顎でクイっとしてついてくるように指示する。

……本当、従^{いと}兄妹だからって私の扱い酷くない？ 梨香子さんには絶対そんなことしないくせに。まあそれは当たり前だけど。

「えー……、後から他のドクターとか看護師さんとかに何か言われるの嫌なんだけど」

「言いたい奴には言わせとけ。ムカついたら俺の親戚だつて言つとけ。後から俺が黙らせる」
「……」

そんな横暴な。文句の一つでも言いたいけれど、口で傑くんに勝てるとは到底思えない。十倍くらいで返つてきそうだからやめておいた。

身内の私が言うのもあれだけど、そもそも傑くんは顔が整っているため既婚者なのにとでもよくモテる。それは職員に限らず、患者さんや病院に出入りしている業者さんまでとそりゃあ幅広くモテているらしい。こうして横暴なところがよく顔を出すし、梨香子さん以外には鬼畜と罵られても仕方ない発言ばかりなものだから、身内としてはどうしてモテるのか理解に苦しむところもあるけれど。腕の良さは確かなため患者からの評判は上々らしい。

そんな傑くんとただでさえ一緒に歩くだけで噂が一人歩きして面倒なことになりそうなのに、さらにそんな立ち入り禁止のところ私のような部外者が出入りしたとなれば問題視されてもおかしくないだろう。嫌だ、無駄な敵は作りたくない。

「ほら、早く」

しかし私の些細な抵抗も虚しく、腕を引っ張られて連れて行かれてしまう。エレベーターに乗って十一階に向かうと、廊下を少し歩いた先にある医局の中に通された。

「お疲れ様です」

「うっ……、失礼します……」

痛いぐらいの視線を感じる。もう帰りたい。

「誰？」

と近くにいた医者らしき男性が傑くんに声をかけた。

「ああ、従^{いと}兄妹」

「関係者以外入れんなよ」

ごもつともな言葉に、傑くんは「ちよつと野暮用だから三分だけ見逃して。後でアイス奢るから」とあろうことか物で釣ろうとする。

いい大人がそんなもので頷くわけないだろう。そう思っていたのだが……

「じゃあ期間限定で昨日発売したばかりのプレミアムミルクで」

「マジかよ高えやつじゃん。しかも下の売店にないやつ」

「よろしく」

見事に交渉は成立したらしく啞然としてしまった。

それでいいの？ この病院、セキユリティが売りなんじゃないの!? 医局は別なの!?

「ちよつと傑くん……!」

「あ？ 何だよ、ほら早くしろ」
「もう……」

突っ込みたくなったものの、変に騒いで問題視されるのは私も嫌なため半泣きで傑くんを追いかけて奥に進んだ。

「これ、俺ん家の書斎に置いてきてくれねえか」

「書斎？ わかった。流石に今はもう時間ないから仕事終わりでいいならいいけど」

「ああ、それで頼む。悪いな」

「いいよ、ついでだし」

傑くんのデスクなのだろう、彼が向かった先の机はいろんな書類で散らかっていて、小さな山も出来ていた。その山の一番上に置かれていた大きくて分厚い封筒を受け取って逃げるように医局を出る。

「じゃあ私はもう帰るね」

「ああ。助かったよ。ありがとう。書類だけよろしく頼む」

「うん。届けたら一応連絡するね。じゃあまたね」

「ああ。気を付けろよ」

「うん」

これからまたオペが控えていると言う傑くんとは医局の前で別れ、一人でエレベーターに乗り込む。いくら産後に休暇を取るためとは言え、傑くんは働きすぎじゃないか……？ そう思うけど、

私が何か言ったところで意味は無いだろう。梨香子さんに後で連絡しておこうか。

それよりも、予定より遅くなってしまった。お腹は空いたし本当はどこかで食べて行こうと思っていたけれど、これじゃあお昼はコンビニで買って急いで胃に入れるくらいしかできないかな……

そう思いながらドアを閉めようとした時に、「あ、ちょっと待って！」と声がして、慌てて「開」のボタンを連打した。

「はあ……はあ……間に合った。申し訳ない。ちよつと、急いでて」

「いえ……大丈夫ですか？」

「ええ、問題無いです」

走ってきたのであろう、傑くんと同じような白衣を着た姿が、エレベーターの中に勢いよく飛び込んできた。下を向いて息を整えているから顔はよく見えないけれど、多分、傑くんと同年代のドクターだろう。

「そうですか……。えっと、何階ですか？」

「ああ、一階お願いします」

「はい」

どうやら行き先は一緒らしい。今度こそ「閉」のボタンを押し、ドアを閉める。

再び音も無く下がっていくエレベーターの中で、ちらりと隣の影を見上げた。

百五十センチしかない私とは頭一つ分以上違うのではないかというほどの高身長。清潔感のある黒髪は癖毛なのかパーマなのか、見るからにふわふわだ。

「……ん？　どうかなさいましたか？」

きょんとした声と共にこちらを向いたその顔。切れ長の目が鋭く見えるものの、あくびをしたのか、ほんの少し目が潤^{うる}んでいるような気がした。長い睫毛にも滲^{にじ}んだ涙が少し付いて、なんとも色気のある目元。横からだとよく見える筋の通った高い鼻に、大きな口。

……かっこいい。一言、そう思った。

「……あ、いえ、すみません。何でもありません……」

見られていることがバレて、恥ずかしくて勢いよく目を逸らす。

「あれ、貴女は……」

なのに、彼は私の顔を覗き込みようとしてきて。一歩足を引くものの、じりじり詰め寄ってくる。潤^{うる}んだ目元を指で拭^{ぬぐ}っている辺り、さっきまでは涙であり見えていなかったのだろうか。数秒前と逆転した立場に、私は今すぐ逃げ出したい衝動に駆られた。

そんな時にタイミングが良いのか悪いのか、エレベーターが到着を知らせてドアが開く。

「ど、どうぞ。着きました」

「ああはい。ありがとうございます」

下を向きながら手で指し示して、降りたのを確認してから私も足を進める。そのまま逃げるように出口に向かうとした私を、何故だか彼は後ろから呼び止めた。

「あのー」

「……はい？」

「俺たち、……どつかで会ったことない？」

急にぶっきらぼうな話し方に変わり、驚いて振り向いた。耳心地の良いテノールボイスが、直接脳に響いて来る。

「……私と、ですか？」

「うん」

顎に手を当てて、私の顔をじつと見つめる。その眉間はシワが寄り険しいのに、元々の顔立ちの良さなのか、どこか色気を放っているようにすら感じた。

「……人違いじゃないですか？」

こんなイケメン、一度会ったら忘れるはずがない。なのに、私の記憶上に浮かぶ名前は無かった。ということはおそらく知らない人だろう。そんなことよりも、早く会社に戻らないと午後の業務に遅刻してしまう。コンビニにも寄りたいし、急がないと。

「申し訳ありません。急いので、こちらで失礼します」

その場を去ろうとした私を、あろうことか彼はまた呼び止めた。

「待って」

「な、なんででしょうか？」

今度は手首を掴まれてしまったから、逃げようにも逃げられない。そのまま少しの間黙ったかと思うと、ハッとしたように私を見つめた。

「……三年前。ニューヨーク」

「え？」

何を言っているのかわからなくて、聞き返してしまった。

それを聞いて数秒後。私の手首を掴む彼の手に、ほんの少し力が入った。

「やっぱりそうだ。思い出した。髪の色違うからまさかと思っただけ。お前、僕の従兄妹^{いとこ}だろ？
ニューヨークで会った」

ニューヨーク？ 三年前？

私のダークブラウンの髪の毛をさらりと触られて、ビクリと肩が跳ねる。

「……忘れたとは言わせねえぞ？ 僕の結婚式の日のこと」

その言葉で、私の脳裏に一気に様々な記憶が蘇ってきた。

人には誰しも、忘れたい過去があるとは言うけれど。忘れていた、いや、忘れたつもりになって
いたと言った方が正しいだろうか。その記憶が、彼のたった一言で鮮明に思い出された。

「……ま、まさか。あの時の……？」

わなわなと震えながら、顔がどんどん赤くなっていくのが自分でもわかる。それに対して、目の
前の彼はゆつくりと口角を上げ、綺麗な笑顔を作り出す。しかし、それは私にとっては 綺麗すぎ
て怖いものだった。

「ご名答。……まさか、こんなところで会うなんてな」

三年前のニューヨーク。僕くんの結婚式の日のことと言えば、アレしかない。でも、あの日の男
性とは少し雰囲気が違うからか、全然気が付かなかった。

それはそうだろう。あの時は白衣姿ではなく正装だったし、髪の毛もセットされていたのだから。

「なんでここにいの？ 僕に用事？」

私の手首を掴んだままそんなことを聞いてくる目の前の彼に、私は顔が引き攣^{くっつく}る。

「いや、私は別に……呼ばれただけで……」

なんで。どうして。そんな言葉しか頭に浮かんでこない。

どうやら驚きの余り、語彙力がどこかに出かけていなくなってしまうらしい。封筒を掴んでい
る手に無意識に力が入り、中で紙が折れる音がした。

「ふうん？ まあいいや。あ、ちょっと待って、スマホ出して」

「え？」

「早く」

「あ、はあ……」

早くと急かされ、動揺したままスマホを渡してしまった。別に見られて困るようなアプリも無い
からそこは問題無い。言われるがままにロックを解除し、数十秒操作された後に返されたそれ。一
見すると何も変わっていないように見えて首を傾げる。そんな私を見て、彼はニヒルに微笑んだ。

「それ、俺の連絡先入れといたから」

「……え!?」

「今日の夜空けといて」

「ええ……!?」

「せっかく再会したんだ。これも何かの縁だろ？ 食事でも行こう」

「そんな、急に言われても……！」

「今夜十九時。迎えに行く」

「迎えって……どこに」

「あ？ お前の会社に決まってるだろうが」

「でも、勤務先なんて言ってる……」

い、と言おうとして、自分の胸元に社員証がかかっていることに気が付いた。そこには私の名前と社名に部署名、さらにはご丁寧に顔写真まで載っている。会社にいる間は当たり前にと首から下げているから忘れていた。

これじゃあプライバシーもなにもあったもんじゃない。それを手に取り、恥ずかしくて赤面した。「逃げんじゃねーぞ？ ……唯香」

そのしたり顔に、心臓が大きく高鳴った。私の頭を乱雑に撫でて、彼は駆け足でその場を去っていく。乱れた髪の毛を整えながら、私は自分の鼓動が全く落ち着かないことを自覚して、さらに赤面する。とてもじゃないが、動揺を隠しきれない。

「……会社、戻らなきゃ……」

思い出して腕時計を凝視する。あと十分で午後の業務開始時間だ。この病院からは全力で走って十分で着くか着かないか……、というところ。もうお昼は諦めるしかない。

「もうっ……なんなのっ……」

それに気が付いて、私は慌てて走り出した。

全力疾走した結果、ギリギリ午後の業務開始時刻に間に合った私。しかし汗だくで息切れしていたため、同僚たちからの引いた視線がつかかった。

自分の汗臭さがつらい。シャワー浴びたい。そんな気持ちを抑えてどうにか息を整えて、午後の業務を始めたものの。あの男性のことを思い出してしまって、まともに集中なんてできたもんじやない。パソコンに向き合ったばかりなのにため息しか吐かない私を、隣のデスクの先輩、中本（なかもと）さんが困惑気味に見ていた。

「は、春風さん？ 大丈夫……？」

「はい……。大丈夫です」

「そう？ ならいいんだけど……」

「はい」

それに苦笑いしながら席を立つ。

「あ、ちょっとコーヒー淹れてきますね」

「うん、わかった」

このままじゃダメだ。仕事どころじゃない。コーヒー飲んでちよつと落ち着こう。諦めてパソコン画面にロックをかけ、給湯室に向かった。

私は、二階堂総合病院のすぐ近くにあるN薬品に勤めている。先ほどまでいた二階堂総合病院と

同じNIKAIDOグループに属している企業で、社員が言う事ではないかもしれないが、医薬品業界では有名な、いわゆる大手企業だ。

私が勤める会社は、医療機器を様々な病院に卸したり社名の通り医薬品を開発したりと、医療関係に特化した商品を扱っている。私はその中の総務部総務課に所属しており、事務職として新卒入社した。三年目の今年は、自分の仕事だけではなく新人教育も任されて忙しい毎日だ。

定時は十七時半。迎えに行くと言われた時間より二時間以上早い。当然彼はそんなことを知らないから、自分の仕事が終わる時間を言ったのだろう。だからと言って、万が一定時に帰れたとしたりいっただいどうやって待っているのか。まあ、今日に関しては全く集中できていないから残業確定コースだし、案外ちようど良い時間かもしれないけれど。いや、でもそういえば傑くんに頼まれたやつもあるんだった。あの封筒は忘れないうちにすぐ届けないといけないし……

そこまで考えて、文句はありつつも普通に彼との待ち合わせに応じるつもりだった自分に驚いた。あんな口約束、無視してしまえばいいだけだということはわかってる。だけど、傑くんの知り合いということもあるし迂闊なことをしたら傑くんに迷惑をかけてしまうやも。

それならば最初から諦めた方がいいのだ。

「……いや、ほら、連絡先も会社もバレてるし。逃げたくたって逃げようがないし、ね……」

誰に言い訳しているのか自分でもよくわからないものの、ぶつぶつと呟いてコーヒーを準備した。グイッと一杯飲んで、その苦味に眉を顰める。

「……よし、集中しないと」

両頬を軽く叩き、気合を入れて自分のデスクに戻った。

——それから数時間後。

「……やっと終わった……」

自分の要領の悪さを恨みたくため息がこぼれ落ちる。やはり全然仕事に集中できなかった。結局予定していた分の仕事が終わった頃には定時を大幅に過ぎており、十八時半になっていた。急いで帰り支度をして、トイレで化粧直しをする。

これも社会人のマナーであって、別に深い意味は無い。

自分に言い訳を零しつつ、鞆を持って恐る恐る自社ビルを出た。

先に傑くんの家に封筒を届けて……それから会社に戻ってくるってこと？ いやそれは面倒だし……。でも、じゃあどうする？

スマホが着信を知らせたのは、そんな矢先だった。『天音』と表示された画面。それに首を傾げる。そういえば、彼の名前を私は知らない。これだけだと苗字とも下の名前とも取れる。これが彼の名前なのだろうか。いや、社内や友達にこんな名前の人はいない。自分自身で登録した記憶も無いのだから、十中八九これが彼の名前なのだ。

「……はい、もしもし」

意を決してスマホを耳に当てる。

『あ、唯香？ 今着いたんだけど、どこにいる？』

やはり電話の向こうから聞こえるのは耳心地の良いテノールボイスだった。彼、もとい天音さん

からの電話だとわかると、急にそわそわしてしまう。

「……会社の前ですけど……、本当に来たんですね」

『当たり前だろ。……あ、いた。こっちこっち』

こっちってどっちだよ。そんな言葉は飲み込んで、辺りをきよろきよろと見回す。

すぐに見つけたのは、昼間見た端正な顔立ちと共にある真つ黒なセダン。見ただけで高級車だとわかるのは、車に疎い私でも知っている有名なエンブレムが付いた左ハンドルの外車だったからだ。手招きしている姿に躊躇しながらも、小走りでそちらに向かう。

「……お、お待たせしました」

何を言えば良いかわからなくて、そんなことを言いながら会釈する。すると天音さんは昼間とは違い、それはそれは嬉しそうに笑った。

「逃げないでちゃんと待ってたんだけ？ 偉いな」

「……ざ、残業してただけです」

また雑に頭を撫でられて、髪の毛が乱れる。

やめてください、と呟いて手櫛で直すと、今度は面白そうに笑った。

「唯香、この後の予定は？」

「傑くんの家に届け物しないといけないのでそれだけです。……残念ながらそれ以外はございません」

「なんだ、棘のある言い方だな。急に誘ったから怒ってんのか？」

「……」

怒っているのかと聞かれたら、特別そういうわけではない。でもやっぱり良い気はしない。

そもそも私に今日の予定があつたらどうするつもりだったんだろうか。あるいは、私が待たずに帰っていたら？ この人はそういうことは考えなかったのだろうか。悶々^{もんもん}としている私に、天音さんは困ったように眉を下げた。

「悪かったよ。でも、お前こうでもないし俺と話そうとしないだろ。絶対逃げると思ったから」「……よくお分かりで」

凶星なのがさらに腹立たしい。

「まあ、その届け物とやらを終わらせてから、何か食べながら少し話そう。食いたいのものは？」
「食いたいもの……。昨日お金下ろしたから、財布はいつもより潤^{うるお}っているはず。」

「え、つと……じゃあ、和食がいいかな」

パツと思いついたものを言うと、「ん、了解」と微笑んでから天音さんはすぐにどこかに電話をかけ始めた。

「今から二人で伺いたいのですが、個室をお願いしますか」

「えっ!? 個室!?」

思わず口を挟んでしまって、見下ろすような視線を感じて慌てて手で口元を押さえた。

これ、もしかしてめちゃくちゃ高級なお店の予約をしてくれているのでは……!? 普通に居酒屋とか言えば良かった……。後悔するも時すでに遅し。

「ええ。すみません。ありがとうございます。じゃあ、三十分後に」

そう言って電話を切った天音さんは、

「ほら、乗れよ」

高級外車の助手席のドアを開けて、私の手を取ってスマートにエスコートしてくれた。

「いや、自分で乗れますから……」

「いいから、ほら」

初めての経験に、緊張と驚きで心臓がバクバクと激しく動く。そんな私を知ってか知らずか、思いの外優しくドアを閉めてくれる。そしてすぐに彼も運転席に乗り込んだ。

……左ハンドルの車、初めて乗ったかも。

運転するわけじゃないのに自分が右側にいるなんて、なんだか変な感じだ。まあ、そもそも私は免許こそあれどペーパードライバーだから右側に座ることすらほぼ無いんだけど。

そのまま天音さんの運転で傑くんの家に向かい、頼まれていた封筒を書斎に置いてから再び車に乗り込む。向かった先は、二階堂総合病院の近くにある懷石料理が楽しめる料亭だった。

やっぱり明らかに高そうなお店に萎縮してしまう。オフィスカジュアルで来てしまったけれど、ドレスコードとかは問題ないのだろうか。

「いらつしやいませ。お待ちいたしておりました。こちらへどうぞ」

出迎えてくれた着物に身を包んだ上品な女性が、丁寧な頭を下げてからにこやかに微笑んで案内してくれる。聞いた話だここは天音さんの知り合いが経営しているらしく、そのツテで急遽席を

用意してくれたらしい。お店に入る時も、その女性の向こうで他のスタッフの方がキビキビと忙しく動いていたことを知っているため、なんだか申し訳ない気持ちになった。

案内してもらった個室は十畳のスペースで、そこはまるで旅館の一室のよう。一枚板で出来ているであろう大きなテーブルと、座椅子が二つ。促されるままにそこに腰掛けると、畳のいぐさの香りが心地良く鼻に抜けた。

「何食べる？」

「えっと……私、お恥ずかしいことにこういう高級なところは来るのが初めてで。……何かおすすめありますか？」

和食の料亭なのにお品書きにはいくつか横文字も並んでいるように見える。恐れ多くて自分じゃ選べない。

「そうか。苦手なもの？」

「特にありません」

「わかった。じゃあ無難にコースにするか」

「コース……!？」

「ん？ 何か問題あるか？」

「え、いや……」

思わぬ言葉に驚いて、天音さんが見ていたお品書きを見せてもらう。コース料理の値段を確認しようとしたものの、そもそもこのお品書きには書いていなかった。

……もしや、お金持ちは値段なんて気にしないから、書くだけ無駄ってこと……？
ますます自分が場違いな気がして恥ずかしい。……足りなかったらカードで払おう。

病院にいる時と同じ居た堪れなさを感じて、ため息を吐きたくなった。

「ああ、値段なら気にすんなよ？ 今日俺の奢りだ」

そんな時に聞こえた声に、顔を上げる。

「え……？」

「当たり前だろ。急に誘って時間作らせたんだ。何考えてんのか知らねえけど、最初からお前に払わせるつもりねえよ。安心して好きなもの食え」

「でも……それじゃああまりにも申し訳ないです。自分の分は自分で払います」

「いいって。気にすんな」

私を牽制して、天音さんは慣れたようにコース料理を二人分頼む。アルコールは？ と勧められたものの、運転する天音さんが飲めないのに私だけ飲むのは恐れ多い。そう思っただけなら丁重にお断りをした。しばらくして、先附の胡麻豆腐と蛸の煮物が運ばれてきた。天音さんに促されるまま口に運ぶと、今までに無いほどの美味しさに、目を見開く。

「……おいしい」

蛸って、こんなに柔らかくなるの？ 胡麻豆腐も香り豊かでとても美味しい。

「ここ、俺が最前にしてる店なんだ。出てくるもん全部美味いよ」

「そうなんですね！ 私、こんな美味しい料理食べたの初めてです！」

その美味しさに驚いて天音さんに笑顔を向けると、むしろ天音さんの方が驚いた顔をする。

「ここ、僕も梨香子さんとよく来てる常連だけど。連れてきてもらったりしないのか？」

「はい。あくまでも私と僕くんは従兄妹ですし、僕くんは昔から梨香子さんしか見えていないので私のことなんて基本眼中にないので構ってる時間が無いんですよ」

「そういうものか？」

「はい。それに私も普段から僕くんにべったりしてるわけじゃないですよ。友達もいるし。仕事もあるし。ありがたいことに梨香子さんに妹みたいに可愛がってもらってるだけです」

「そうか」

昔から梨香子さん一筋で、私が物心ついた時から僕くんは梨香子さんのために行動していた気がする。

今日だってそうだ。梨香子さんのために私を呼びつけた。そんなのも昔からのことだから、私も慣れたものだ。梨香子さんは優しくて穏やかで良い人だし、私を本当の妹のように可愛がってくれる。僕くんも一応感謝はしてくれるから、そこに不満は無い。というか僕くんに対してはほぼ諦めの方が大きい。まあ、今日みたいに待ち合わせ時間に遅れるのは人として気を付けてほしいけれど、そんな話をしばらくしているうちにコースは進み、前菜、お椀、お造りを経て焼き物が運ばれてきた。今のところどれもが頬が落ちそうなほどに美味しくて、一口食べ進めるたびに目尻がだらしなく垂れてしまう。

天音さんはそんな私を庶民だと嘲笑うでもなく、馬鹿にするでもなく、楽しそうに微笑んでくれ

る。食べているところをじつと見られるのは恥ずかしいけれど、美味しさの方が優っている。その視線を気にしないようにして、私も存分にこの美味しさを味わうことにした。

食事が終わると、静かな空気が流れた。食事中は美味しさに顔を綻^{はじく}ばせているだけだったものの、改めて考えると今の状況の可笑しさに、目眩がしそうだ。

食後に出されたお茶を少しずつ飲んでいるものの、緊張からかどこかそわそわしてしまう。

「唯香、いろいろ聞いても良いか？」

「はい……」

「つーか、そもそもお前とはあの日会ったつきりだったから、お前のこと何も知らねえんだよな」

「そう、ですわ」

私も、天音さんのことは全然知らない。じつと見つめていると、天音さんは考えてからこちらを向いた。

「唯香、歳は？」

「二十五、です」

「ふーん。俺は三十五」

「傑くんと同じ年なんですか？」

「そう。俺と傑は大学の同期」

「なるほど……あれ？ あの時そんな話もしたつけ……」

「したな」

「……すみません」

「いや、気にすんな。もう三年も経ってるんだから」

「はは……」

大学の同期で、今は二人とも二階堂総合病院のドクターだなんて。そもそも、二階堂総合病院は患者層の関係で一流の腕を持つドクターしか雇っていないと聞いたことがある。

傑くんは、普段はあんな感じだけど、アメリカに渡って向こうでも医師免許を取得して、数々の難病患者さんを救ってきた、まごうことなきエリート医師だ。その同僚なわけだから、気が付かなかっただけでもしかして、この人もかなりのエリートなのでは……!!

「あ、天音さん……は、そういえば何科のドクターなんですか？」

「俺？ 俺は外科。だから傑とは院内ではさほど関わりが無いかな。カンファレンスで会うくらいだ」

「そうなんだ……」

二階堂総合病院の外科医なんて、明らかにエリート中のエリートじゃないか……！ それ以上は私の頭が処理しきれなくなりそうだったため、院内の話は聞かなかった。

「……そういえば、天音 さんって、苗字ですか？ 下のお名前ですか？」

話題を変えたくてずつと気になっていたことを意を決して聞くものの、天音さんはニヤツと笑う。「——どっちだと思う？」

その楽しそうな表情に私の顔が引き攣^{くっ}る。確かに質問したのは私だけけれど、質問に質問返しはや

めてほしいと思ってしまう。

「……御苗字でしょうか」

「いや？ 違う」

「じゃあ、下のお名前ですか？」

「そう。ご名答」

案外すぐ答えてくれたことに複雑な心境になった。

「……では、御苗字を教えてください」

「なんで？」

「なんでって……」

大して親しくもない間柄で、まして年上で傑くんの同僚のドクターを下の名前で呼ぶなんて、私には到底無理だ。しかし、天音さんはそれを全く理解できないようで不思議そうな顔をする。

「別に苗字なんて知らなくてもいいだろ。俺のことは天音って呼べよ。さん付けもいらないから」

「そ、それはダメです」

「なんで」

「なんでって……」

「ほら、天音って呼べよ」

「いや、……」

ああ、もういいや。これはもう埒が明かない。苗字は今度傑くんに聞こう。

そう思って口を閉ざすと、何を思ったのか天音さんは水を一口飲んでから立ち上がり、テーブルを挟んでいた私の元へ来る。そして耳元に顔を寄せ、

「唯香」

と囁いた。

「……三年前、一緒に寝た間柄だろ？」

「っ……………」

「お前がああの夜、どれだけ俺に縋って乱れてよがってたか、覚えてんだろ？ 全部傑にバラしてもいいけど？」

一瞬にして、息が吸えなくなった。耳にかかる息が、あの夜を思い出させる。

「っ……………」近い、です。離れてください」

天音さんの顔を押しつけるわけにもいかず、自分の耳を手で押さえつつ、顔をできるだけ逆側にそらす。

「嫌だ」

そんな私の反応を見て、面白くなったのか天音さんはさらに追いかけてくる。逸らした顔を手で元に戻され、ゆっくりと頬を撫でられる。その撫で方がいやらしくて、無意識に呼吸が浅くなった。

「ほら、天音って呼べよ」

「や……」

「じゃないと、このままキスするけど」

「っ!？」

そんなこと言われても、いきなり呼び捨てなんて……。でも、呼ばない限り私を解放するつもりはないようで、どんどん顔が近付いているような気がする。

「ちよっ……まっ……」

「待たねえ」

このままじゃ、本当にキスされてしまう。

なによりも、その目で見つめられているというこの体勢が恥ずかしすぎてもう無理だった。

「あ……あ、あまねっ……!」

自棄になって言葉を落とすと、彼は「ふっ……言えるじゃん。よくできました」と目尻を下げて笑った。その小さい子を諭すような返事に、自分が弄ばれたような気がして悔しくて悔しくてたまらない。

「これから俺のことはそう呼べよ。さん付け禁止」

そんなの横暴だ。そう言いたいけれど、今は離れてもらう方が先だった。

「わかりましたから、離れてください」

「呼べば離れるとは言ってない」

「なっ……!」

酷い！ そんなの屁理屈だ……! !

至極面白そうなその表情は、まるで新しいおもちゃを見つけた小さな子どものよう。

そして、そのまま顔が近付いてきて。

「っ!？」

触れるだけのキスは、私を硬直させるには十分すぎるほどだった。

「ハッ、顔真っ赤だな」

「な、な……」

何かを言い返したいのに、何も言葉が出てこない。

息の吸い方も忘れてしまったみたいに、なんだか胸が苦しくて、上手く呼吸ができない。なんだ、これ。

「何も初めてじゃないんだし。そんなに動揺するか？」

クスクスと笑いながらも、ようやく離れてくれた。それにより、やっと呼吸ができるようになった。少なからずホッとしつつも奪われてしまった唇を思わず袖でゴシゴシと擦る。

「失礼な奴だな」

「きゅ、急にこんなことする方が失礼ですよ。セクハラですよ!」

「セクハラあ？ キスなんて、挨拶みたいなもんだろ？」

「ここは日本です!」

確かに僕くんと同じなら、貴方はアメリカにいたのかもしれないけど！ ここは日本だし、多分貴方もここ数年はずっと日本で暮らしているでしょう! !

そんな思いをぶちまけたいけれど、何かを言えば五倍で返ってきそうな楽しそうな顔だ。多分こ

の人、傑くんと同じタイプで口が立つ人だ。そう思うと保身のためそれ以上は何も言わずに口を噤むしかなかった。

結局その後は、天音が急患で病院から呼び出しをされたためそのまま開きとなった。

「悪い。オンコールだ。また連絡する。無視すんなよ？」

「……わかってますよ」

弱みを握られてしまつては、そう返事をするしかない。

宣言通り天音は料金を払ってくれて、私に財布すら出させなかった。丁重にお礼を伝えて別れ、そのまま天音が手配してくれたタクシーに乗り込むと、自宅の住所を伝えて滑らかに発進する。

十五分ほどで着いた自宅であるオンボロアパートの中に入ると、すぐにお風呂を沸かしてシャワーを浴びた。熱いお湯を頭から被る。

下を向き自分の髪の毛から滴り落ちるお湯を見つめながら、今日のことを思い返していた。

まさか、天音と再会する日が来るなんて思ってもみなかった。まして、あの病院にいるだなんていや、可能性を考えなかったわけじゃない。でも、そもそも天音と会ったのは傑くんの結婚式の日だけなのに、私のことを覚えていただなんて……

あの日、私たちは初対面で、酔った勢いもあつて一夜を共にしてしまったのだった。

——遡ること三年前。

当時まだ大学四年生だった私はすでに今の会社への内定をもらつていたため、ニューヨークでの挙式の招待状が届いた際にすぐに出席で返事を出していた。季節は秋。

「就活終わったんだし髪染めて来れば良かった」

黒髪に戻したままのロングヘア。綺麗にセットしてもらったけれど、どうせならもうちょっと柔らかい色にしてくるべきだったと少し気持ちは落ち込んでいた。

会場はニューヨークのマンハッタンから傑くんが手配してくれたタクシーで一時間ほど。

森の中に建つそこは、築百年以上の歴史を持つ本物のお城を改造したホテルだ。

「すごい……本当にお城だ……」

周りが紅葉した木々に囲まれていて、とても幻想的。髪色で落ち込んでいた気持ちは、すぐに上向きに戻った。その建物の中にはドイツの家具職人が手掛けた家具が置かれている。温かみと優雅さを兼ね備えた内装は、そこにいるだけで自分自身がセレブやお姫様になったと錯覚させるような素晴らしい空間だった。

アットホームな式がしたいという梨香子さんの強い希望により、親族とそれに準ずる人のみが招待された挙式。そのため、私と同年代の招待客はほほえない。しかし素敵な空間と綺麗なドレス姿の梨香子さんを見ているだけで、そんなことは気にならなかった。

讚美歌も、日本で聴くものとは迫力が違うような気がして圧倒された。指輪の交換も誓いのキスも、まるで一枚の絵画かのような光景で。

惚れ惚れするほど綺麗な梨香子さんの幸せそうな表情が印象的だった。

挙式のあとにウエディングレセプションが行われ、その会場に向かうとスタッフの方に席に案内された。

隣には、懐かしい男性が座っていた。それは、随分と久しぶりに会う私の父親だった。

私と傑くんは従^{いと}兄妹^{とこ}同士。厳密に言えばお互いの父親が兄弟だ。しかし私の両親は私が幼い頃に離婚しており、私の親権は母親に渡ったためその後父親には全く会っていないかった。

そういう場合は普通傑くんとも疎遠になることが多いのだろうが、傑くんの幼馴染だった梨香子さんとも仲良くしてもらっていたからだろう。私は未だに傑くんと連絡を取り合っていたのだ。

「唯香」

「……お久しぶりです」

「久しぶりだな。こんなに大きくなって。見違えたよ」

「……どうも」

久しぶりに会った父親は、記憶上よりも大分老けている印象だった。当たり前だ。私と一緒に暮らしていた時から十年以上経ったのだから。

父親は久しぶりに会った私といろいろと話したかったようだが、私は今更何を話したら良いかわからず。『お父さん』と呼ぶことすら躊躇してしまい、適当に返事をしながら出された食事に集中した。正直、どんな話をしたのかわかって全く覚えていない。

パーティが終わり、何か言いたそうにしていた父親から逃げるように別れた私はそのまま二次

会に顔を出した。まあ、知り合いなんていないから傑くんと梨香子さんに挨拶だけしてすぐ部屋に戻ったのだけれど。

その頃にはすでに外は暗くなり始めており、私はそのままホテルに宿泊するためフロントへ。傑くんと梨香子さんが用意してくれていた部屋にチェックインし、そこで一息つく。

窓からはハドソン川の雄大な絶景を楽しむことができ、部屋も広くてとても豪華だった。

「すごい……！ 綺麗！」

それに興奮冷めやらぬ中、日が完全に落ちる前に絶景を写真に収め母親にメッセージで送信。そのまま母親とやり取りを続けながらゆっくりしていると、ふいに梨香子さんからのメッセージがスマートフォンに届いたのだ。

「部屋に戻る途中にラウンジで美味しそうなワインを見つけちゃってね。一度着替えてからまたラウンジに来て今そのワインをいただいているの。良かったら唯香ちゃんも一緒にどう？」

それを見て、せっかくだしと思い『わかりました。今から行きます』と返事をする。美味しいワイン、楽しみだなあ。

部屋を出て、指定されたラウンジへ向かった。

「梨香子さん……？」

しかしそこで予想外の事態が広がっていた。梨香子さんと傑くんは、メッセージで話していたワインの他にもたくさんのお酒を飲んでいたらしい。梨香子さんが大分酔ってしまっていたのだ。

「あ、唯香ちゃん！ こっち！ 一緒に飲もう！」

「梨香子さん……」

その頬は真っ赤で目がとろんとしており、言葉を失う。

どれだけ飲んだのだろう。普段の梨香子さんからは考えられないほどに酔っており、テーブルの上を見るとそこには何本も空になった数種類のお酒のボトルが。そしてそんな梨香子さんはまだ飲もうとしているらしく、傑くんの持つワイングラスに新しい赤ワインを注いでいた。

「ほーら、唯香ちゃん、ここ！早く座って！」

口調はしつかりしているし聞き取れる。会話も出来ているからまだギリギリ大丈夫か……？

そう考えて「梨香子さん、飲み過ぎですよ」と言いながら隣に腰掛けて梨香子さんが手に持つグラスを受け取った。

「あ！唯香ちゃん！それ私の！」

「梨香子さん、飲み過ぎですって。すぐ二日酔いになるんだから、やめといたほうがいいですよ？」

「いいの！結婚式の日くらいハメ外させてー！」

「もう……」

梨香子さんは昔からお酒が強い分、大量に飲んでしまう。そして周りの人に絡みに行ったり飲ませようとしたりとなかなかタチが悪い。いわゆるからみ酒というやつだ。しかも翌日には二日酔いに悩まされ、前日の行動を全く覚えていないという特大のオマケ付き。そのため普段は傑くんも梨香子さんに人前でアルコールを飲まないように口酸っぱく言っていた。

でも式のためにしばらく禁酒して、ダイエットを頑張っていたのも知っている。一生に一度のハ

レの日くらい好きだけ飲みたい。その気持ちもわかるし、傑くんも今日だけ特別にということで許可したのだろう。そう思うとダメとは言えず、ほぼ意味がないとわかりつつも「飲み過ぎないこと」を約束の上でグラスを返した。

その代わりに新しいグラスを手渡され、そこにたっぷり注がれてしまったワイン。

「梨香子さん……？えっと……これは一体……」

「すごく美味しいワインだったから、唯香ちゃんにも飲んでほしくて。でもね？このワインおいしいのよ。美味しいからたくさん飲んでるのにすぐ無くなっちゃうの。ね、変でしょう？」

梨香子さんは普段からふわふわしている人だけど、こんなにめちゃくちゃな言動はしない人だ。

やはり相当酔っているよう。

「そりゃあ飲めば減りますよ……梨香子さんすごいペースで飲んでるでしょう。いいですか？ワインは飲めば無くなるんですよ！」

私は当たり前前のことを梨香子さんに言い聞かせるように伝えながら、内心焦りが出てきていた。

「やっぱり？まあいいや。だからいつぱい入れとくね。早く飲まないと私が飲んじゃうからね！」

……それはまずい。

これ以上飲ませたら、梨香子さんは明日ともに起き上がることにすらキツくなるだろう。どんなにお酒が強くて、下手したら飲み過ぎて急性アルコール中毒にだってなりかねない。しばらく禁酒していただからアルコールの回りも早いはず。それは絶対あつてはならないわけ。

まだ半分以上ワインが入っているボトルを見て、手に持ったつぷりとワインが入ったグラスと何

度も見比べる。

「……でもこれ、梨香子さんの代わりに全部飲んだら私が酔いつぶれるんじゃない？」

梨香子さんの隣を見ると、すでに同じ理由で大量に飲んでしまったであろう傑くんは一人で意味も無く笑っている。しかも、梨香子さんと同じように誰かを呼んだのかスマートフォンを操作してはニヤニヤしていた。

「傑くん……」

それに引いた視線を送りながらも、

「ほら唯香ちゃん！ 早く！」

「あ、はい……」

梨香子さんに勧められるがままにとりあえずグラスを口に運んだ。

十分ほどしてやってきたのは、見目麗しい男性だった。切れ長の目が、呆れた様子で二人を見比べていたように思う。

「おい、傑？ 梨香子さん？ ……マジかよ。二人とも馬鹿みてえに酔ってんな」

傑くんと同年代の男性、それが天音だったのだ。

天音は目の前の酔っ払い二人を見て、深いため息を吐く。そしてふと視界に私が入ったらしく、

「……ん？ お前誰？」

と雑に声をかけてきた。

「……私？ 傑くんのイトコ」

「へえ。こいつに従兄妹なんていたんだ？」

物珍しそうな顔をして、私が飲んでいたワイングラスをひょいと持っていく。

「あ」

「んだよ」

「それ私の……」

返して、と言うものの、すでに天音は私のワイングラスを口に傾けていた。

「ちよつと、勝手に飲まないでよ」

「……お前がどれくらい酒強いのかは知らねえけど、飲み過ぎたらこいつらみてえになるぞ」

そんなことを言われても、実は天音が来た頃にはもうすでに梨香子さんにガンガンに飲まされてしまい、頭はふわふわしていた。

「だって、私が飲まないと梨香子さんがこれ全部飲むとか言うから。これ以上飲ませたら私が傑くんに怒られちゃう」

「いや、この調子じゃもう手遅れだろ」

「……」

天音がワインを飲みながら指差した先には、いつのまにか寄り添うように寝てしまった二人の姿。「ハメ外しすぎだろ。ガキかよ」

「まあ、仕方ないでしょ。酒癖の問題で梨香子さん、滅多にお酒飲ませてもらえないって前に嘆いてたから。最近は今日のために禁酒してたし」

「へえ。……まあ、これは確かに彼氏や夫からすれば飲ませたくはないわな」
そう笑った天音は、あっという間にグラスのワインを飲み干してしまった。

「……二人、どうしよう……」

「あー……こいつらの部屋の場所知ってるか？」

「知らない……」

そうだ、運ぶにしても部屋がわからないとどうすることもできない。時間も時間だし部屋に一度戻ったって言ってたからチェックインはしてるはず。だけど肝心のカードキーは見当たらないし、部屋番号がわかるものも何も持っていないさそうだった。

「仕方ねえな……おい傑！ 部屋どこだ！ 早く言え！」

どうするのかと思っていたら、あろうことか天音は傑くんを無理矢理起こして部屋番号を聞き出した。どうやらカードキーもフロントに預けているらしい。

果たしてその部屋番号が合っているのかは不安しかなかったものの、フロントまで天音が行ってくれて、無事にカードキーを受け取ってきてくれた。

「よし、じゃあ行くか」

頷いて、とりあえず二人を部屋まで運ぶため私は梨香子さんを。天音は傑くんを連れて行くことに。

「梨香子さん、立てます？」

「んー……無理い」

「部屋に着くまでの間だけでいいですから、ちょっと頑張つて！」

「唯香ちゃん、連れてつてえ」

「連れて行きますから。だから立つて歩いてくださいよー！」

ラウンジのスタッフに天音が流暢な英語で声を掛けてくれて、とりあえず腕を肩に回してどうにか起き上がらせる。エレベーターの存在にここまで感謝したことはないだろう。そのまま二人の部屋に運んでベッドに寝かせた。キングサイズのベッドで寄り添って眠る二人を見届けて、サイドテーブルに書き置きを残して部屋を出る。二人の部屋の前で、天音と一緒にようやく息を吐いた。

「――さて、あの残ったワイン、どうする？」

「……どうするって言われても……もう片付けられてるんじゃない？」

「いや、スタッフに一応残しておいてくれて頼んである」

「そうなんだ……それならまあ、もったいないから飲もうかな」

「お前も酔い潰れて寝るとかやめろよ？」

「大丈夫。まだ酔ってないし」

そんな強がりを言つて、二人並んでラウンジへ戻ることに。どちらも自己紹介をしなかったため、当時はお互いの名前すら知らない。会話も特に無いまま、ひたすらお酒を飲んだ。

「お前、部屋どこ？」

「二〇七号室」

「マジかよ。俺の向かいじゃん」

「へえ……」

すっかり酔ってしまっていた私は、相槌すら適當になっっていた。

「ここもう閉まるって言っし、……俺の部屋で飲み直さねえ？」

普段なら、名前も知らない初対面の男からそんな風に誘われたところで、絶対についていけない。なのに、この日に限っては。

潰れてはいないものの、今までにないくらい酔っていた私は、頭が全く働いていなかった。

「ん、いーよ。そうする」

頷いた私に、天音は一瞬驚いた顔をした。もしかしたら、冗談のつもりだったのかもしれない。

まさか私が頷くなんて思っていなかったのだろう。

「……お前、意味わかって言ってる？」

そんなお伺いにも、「うん。わかってるわかってる。早く行こー」なんて、知ったかぶりして適当に返事をした。

天音の言っていた通り、そこは私の部屋の真向かいだった。どこぞの貴族のような高そうな家具ばかりが並ぶ部屋は、当たり前だが私の部屋よりも豪華だった。

そこで二人、ソファに座ってワインを飲み直す。口当たりがまるやかで、フルーティーな味がとても美味しい。

「このワイン旨いよな。近くにワイナリーがあって、そこから直接卸してるらしいよ」

「へえー……そうなんだあ。私、このワインすっごく好き。フルーティーで美味しい」

「確かに、飲みやすくて女が好きそうな味だな」

「うん」

普段はこんなにワインばかり飲むことはないのだけど。美味しさに負けて飲みすぎてしまった。

「……貴方は、傑くんの友達？」

「ああ。大学の頃からのな」

「ふーん。じゃあ貴方もドクターなんだ？」

「まあな。お前は？」

「私はただの大学生。まあ、内定ももらったし四月から就職するけど」

酔っていると、初対面で年上相手なのにどうも敬語が外れてしまう。

でもタメ口でも怒らないみたいだからいいか。なんて。グラスを傾けながら微笑んだ。

そのうち会話が途切れ、静かな時間が流れた。多分、私はそこで少し寝落ちしまったんだと思う。気が付くとベッドの上に寝ていて、目の前には男性の顔のドアップが。

「ひっ……!？」

「……あ、やっと起きた」

驚いて小さく悲鳴を上げた私を、その男性、もとい、天音は呆れたように見つめた。

「人のこと誘惑しといて、自分は寝るんだもんな。良い身分だよなマジで」

「なっ……なに……」

何が起こっているのがわからなくて、言葉に詰まる。

「なにつて……だからお前が誘ってきたんだろ？」

そう言った直後に、全身を走るような甘い刺激が走って「あぁっ……!？」と甲高い声が漏れた。思わず手で口元を押さえるものの、途切れることなく襲ってくる刺激に漏れる声は抑えられない。一体何が起きてるの!？」

なんとか視線を動かすと、私の胸に吸い付くように舐めている天音がいた。

「な!? なんで!? ……あ、あぁっ……」

胸の頂を口を含み、舌で転がされてまた甘い吐息が漏れる。

天音の右手はもう片方を弾くように弄り、左手はお腹を通って足へ向かい、内腿を何度も摩っていた。その動きがいやらしくて、それすらも刺激に感じてしまつて身を振る。

「いきなりキスしてきたのはお前だからな？」

「なっ……うそっ」

「嘘じゃねーよ」

まさか、そんなわけ。

しかし、状況に追いついていけない頭に反して、身体は甘い刺激に正直に跳ねる。

次第にワンピースの裾をたくし上げられて、左手は内腿を伝って中心にどんどん向かう。右手の動きはそのままだに、いつの間にか唇は天音のそれに塞がれていた。

「ん……あ、ああ……」

舌を吸われ、ジュルジュルという水音が頭に響く。激しいキスに息切れしながら目を閉じている

と、左手が私の中心にたどり着き、容赦無く刺激した。再び私を襲う甘い刺激。思わず大きな声があがる。指で何度も撫でられて、擦られて身体が跳ねる。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ……」

肩で息をしていると、ベルトを外す音が聞こえてちらりと視線を送る。すると私をギラついた目で見下ろしながら、ゆっくりと私の中に入ってきた。

「あ、あ……ああああ……んんーっ……あぁっ!」

奥まで入ってきただけで、私の身体は数回痙攣した。

「っ、イッた？」

「はぁっ……はぁっ……んあ、まって、まだ動かないでっ……」

手で制するけれど、その手を取られて唇を塞がれる。

「んんう……ふあ、あっ……ん、あ……んんっ、ああん!」

キスと同時に腰が動き始めて、私はもう抗うことができない気持ち良さと快感に虚ろな目でまた全身を跳ねさせた。それでも天音は止まってくれなくて。

「まだ、へばんじゃねえぞ」

どんどん早くなる律動。肌がぶつかり合う乾いた音が、辺りに響く。

荒々しく塞がれた唇の端からこぼれ落ちるように伝う唾液が、私の耳を濡らして。

それを掬うように舌を這わせた天音に、思わず身体にギュッと力が入った。

「っ……マジかよ、まだ締め付けんの？」
うっすらと目を開けると、汗ばんだ天音のキラキラした顔が目に入る。ぼやけた視界の中でもそれははっきりと映し出されていて。

どうして私は今、こんなに綺麗な人と身体を重ねているのだろう。

そう、今更また疑問に思ってしまう。

「……お前、今違うこと考えてるな？」

「え……」

「この状況で俺以外のこと考えてるとか、マジでムカつく」

「ち、ちがつ」

「そんな余裕無くしてやるよ」

「や……ま、って……」

「待たねえ、よっ」

言葉と共に深く入り込む天音の身体。

「ひゃああああ!」

甲高い声を上げながら身体を仰け反らせ、襲ってくる甘く激しい刺激に頭がクラクラする。

先ほどまでとは比べ物にならないほどの激しさに、上手く息ができずに

「っ、は、ま、って……ちよっ、くるしっ……」

そう天音の肩をか弱い力で叩いた。しかし天音は

「……ハッ……悪い、もう止まれそうもない」

バツが悪そうにそう口角を上げてから、汗で少し濡れた前髪を邪魔だと言わんばかりに掻き上げる。その姿がいやに妖艶で、色気が溢れていて。

「やべえなっ……ハマリ、そうっ」

「ま、ってっ……ああっ、んんっああっ!」

ぐ、っ。また一つ胸が苦しくなる。

言葉通り止まることを知らない天音は、その律動をより激しくしながら私の頬を優しく撫でた。切な気で、儼いその表情に何故か涙が溢れる私。フツと笑いながらその涙を舌でぺろりと舐めた

天音は、一気に表情を歪めて突き上げるように腰を動かした。

「いやっ……! ま! って! なにっ……!」

「っ……ハッ……」

「それいじょ……、ダメっ、になるっ」

「ハッ……っ、ダメになれよっ!」

「ひゃっ……あああっ!」

びくんびくんと何度も痙攣する身体。頭にビリッと電流が走ったように目の前がチカチカして、一瞬で目の前が真っ白になる。それで終わると思っていたら、まだ天音は身体を離してくれなくて、身体を横向きにされ、片足を上げられてもっと奥深くまで突き上げてくる。イッたばかりなのに、さらに奥を激しく突いてくるから本当におかしくなってしまうようで。